

T S した俺は
オナホ妖精になっ
友人の玩具になる



T S した俺は
オナホ妖精にな
友人の玩具にな

目次

登場キャラクター 5ページ

第1章 ラッキーラビット 7ページ

第2章 装備を買おう 43ページ

第3章 動画撮影をしよう 60ページ

第4章 女の子とエッチしよう 92ページ



| | | | |
|------|----------|-------|--------|
| 第5章 | 開発会社に行こう | | 109ページ |
| 第6章 | 黒魔術 | | 130ページ |
| 第7章 | 向こう側 | | 145ページ |
| あとがき | | | 154ページ |
| 作品紹介 | | | 156ページ |



登場キャラクター

■ 綾野 光（アヤノ ヒカル）／ヒカルン

主人公。男。廃ゲーマー。キャラ名は「ヒカルン」。女妖精の魔法使い。ゲームは必ず女性キャラ。女性キャラ好き。

大学四年目だが、卒業の予定は特にない。

■ 武田 豪（タケダ ゴウ）／ゴウケン

主人公の親友。男。廃ゲーマー。キャラ名は「ゴウケン」。重戦士。ゲームは必ず戦士のマッチョ好き。

大学四年目だが、卒業の予定は特にない。

■ 相沢 真美（アイザワ マミ）／アイザック

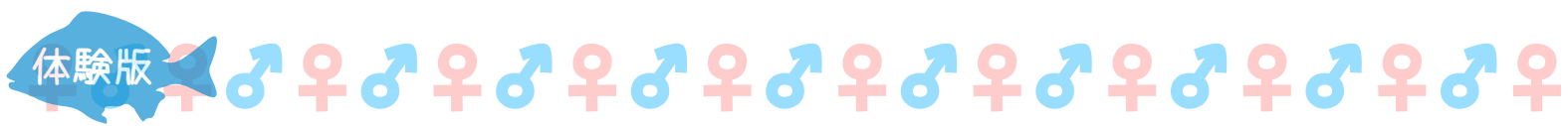
主人公たちのゲーム仲間。女。廃ゲーマー。キャラ名は「アイザック」。コスプレ衣装デザイナー兼、映像作家兼、変態。主人公たちのカップリングに悶絶する。

大学四年目だが、卒業の予定は特にない。



第1章

ラッキーラビット



俺は今、六畳一間の和室にいる。大学生向けの、寝起きだけを目的とした物件。そこにコタツ机を置いて、ノートパソコンをのせている。

大学四年目。留年三回。卒業する気など、とうの昔に失せている。俺は、ゲームに人生を捧げている。名前は綾野光^{あやのひかる}。大学生兼、廃ゲーマーだ。

現在、はまっているのは、『トレジャー・サバイブ・ファンタジー』というオンラインゲームだ。略称はTSF。TSFは、オタク界ではなじみのある言葉のために、検索汚染だと批判もある。しかし、面白いから無問題^{モウマンタイ}。俺は女妖精の魔法使いとして、ゴリゴリと攻略を進めている。

「ヒカルン、魔法の支援を頼む」

俺のキャラの名前が呼ばれた。ひらひらの服を着た、ふわふわ浮かぶ可愛い妖精さんが、俺の操るヒカルンだ。

声を出したのは、俺の部屋に入り浸っている友人だ。こいつの名前は武田豪^{タケダゴウ}。高校時代はラグビー部のスクラム要員だった。今は俺と同じ廃ゲーマーだ。操るのは、本人によく似た重戦士だ。キャラの名前はゴウケン。俺も武田も、自分の名前をもじったキャラクターを使っている。

武田は、俺の真向かいに座り、やはりノートパソコンを開いている。素早くマウスを動かしてキーボードを叩き、迫り来る敵に対応する。俺も魔法で支援して敵の数を減らしていく。雑魚敵を一掃して、戦闘が終わった段階で、俺はペットボトルに手を伸ばした。

「なあ、武田。プレイ時間が一千時間以上。俺たちは条件を満たしているよな」

「ああ。あとは、ラッキーラビットを見つけて、捕まえるだけだ」

武田は腕組みをして応じる。

「トレサバの噂を確かめたいんだよなあ」

何度目かの言葉を、俺は言った。

『トレジャー・サバイブ・ファンタジー』では長すぎる。だからといって、よく見る『TSF』では、ちよつとエッチな気分になる。だから、俺たちのあいだでは『トレサバ』と呼んでいる。

このゲームには昔から噂がある。一千時間以上プレイして、



「だから、ウサギと言えは穴だろうが。穴を見張っていれば、









「えーと、ちよつと待て」

「んなわけあるか！ 武田、鏡持ってこい！」

机の上に置いた卓上ミラーを、俺はのぞき込む。

身長三、四十センチメートルぐらいの裸の女性の姿が映る。

幼児体型で、背中にトンボのような羽が生えている。トレサバの女妖精そのままの姿が、鏡に映っていた。

「マジで、ヒカルンになっている。それにしても、何で裸なんだ？」

俺は横から見たり、うしろから見たりしながらこぼす。

「そりゃあ、体が小さくなったからだろう。おまえはまだましだよ。俺なんか服が破れてしまったからな」

ゴウケンの武田が悲しそうに言った。まあ、俺たちのような人間は、服をあまり持っていない。破れてしまえば、替えがないからダメージがでかい。俺はふわふわと飛び、武田の頭をなでて慰めてやった。

「しかし、これどうやって戻るんだ。すごい現象なのは分かるが、このままではまずいよな」

俺はふわふわと部屋の中を飛びながら、なるべく武田の視界に入らないようにする。裸なので、さすがにちよつと恥ずかしいからだ。

「ヒカルン」

武田が俺のキャラ名を呼びながら、胴体を左手でつかんできた。俺はペットボトルでも持つように、胸と腹をつかまれてしまった。

「何だよ、武田」

無理矢理ふんづかまえられて、俺は武田の顔の前に持ってこられた。



– 19 –

股間に巨大な舌が押しつけられた。唾液のぬめりと、舌のデコボコが俺の股のあいだでゆっくりと動く。全身をよく分らない感覚が貫いて、豆粒のような心臓がバクバクと音を立てる。神経が一ヶ所に集中したように快感の大波が襲ってきた。

「こら、やめろ！」

さかさまになったまま俺は抗議する。視界の前には、あぐらをかいている武田の下半身が見える。破れたズボンとパンツのあったところに男性器がある。その竿の部分が首をもたげるように膨らみつつあった。

こいつ、変態か！

俺は、今まさに屹立しそうになっているペニスを注視して顔を真っ赤に染める。こいつ、妖精になった俺の股間をなめて興

奮していやがる。

「おい、武田、本当にやめろ、怒るぞ！」

俺は、眼下の股間を見ないように目を半分だけ閉じながら、文句を言う。

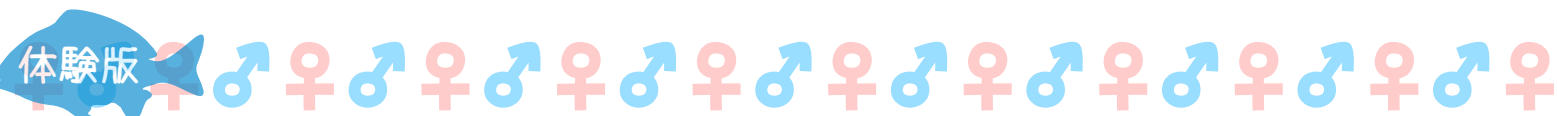
「ぬるぬるした液体が出てきた。これは愛液というやつではないのか？」

「はあっ？ そんなの出るわけないだろ、うっ！」

さかさまになった俺の股間に、人差し指を押しつけられた。

武田は、指先をなじませるように、何度も穴のところを押してくる。胴体を握られているから、まったく見えないが、感覚で分かる。

こいつ好き放題しやがって。怒りで頭が沸騰したが、あまり



さかさまの視線の向こうでは、武田のペニスがこれでもかというほど大きく勃起していた。

「ひゃんっ！」

指がすぽんと引き抜かれた。自分では見えないが、入り口がひくひくと動いているのを感じた。

「んっ！」

また指を入れられた。ゆっくりと中をかき回される。

サイズ的にはビール瓶の太い方を入れられているようなものだ。股から腹にかけて体が引き延ばされて、押し広げられているのを感じる。それとともに、指が前後左右に動くことによつて、この体は思ったよりも伸縮性があるのだと知った。

そもそも妖精は人間ではない。同じルールで体ができている

わけではない。精霊のようなものが、人の形になっているだけだ。トレサバの設定がどうなっていたのか詳細は忘れたが、人間と同列の生物ではなかったと記憶している。

「何本入るかな」

耳を疑う声が聞こえた。指一本でもきついのに、何本も入れるつもりなのか。裂けて死んだらどうするつもりだ。俺はどうにかして胴体を押さえている拘束を解こうとする。

人差し指を入れたまま、中指が陰部に添えられた。肉と指のあいだをなでて広げようとしている。刺激の強さに、頭の中がチカチカとする。しかし体中の筋肉はゆるみ切っている。足はだらんと垂れ下がっていて動かせない。

ぬるりと二本目の指が入ってきた。骨盤が外れて開いた気が



「二本目も大丈夫だな。三本目もいけるか試してみよう」

「中はどうなっているんだ？」

「ぐはっ！」

體驗版



ンジしてみよう」

何をする気なんだ。

「たぶん、この機会を逃したら、一生チャンスは巡ってこない」
武田のやつ、何を言っているんだ。

「うわあっ！」

俺はぐるとひっくり返された。上下が逆転して、頭が上で足が下の状態になる。穴にたまった液体が、内ももを伝って、とろりと足の先まで垂れてくる。

俺の下腹部には三本の指が入れたまままだ。俺はゴウケン
の姿になった武田の顔を見る。真剣な顔をしている。そして下
の方ではペニスを勃起させている。

「いったい、何をする気だ。まさかとは思うが、エロマンガみ







亀頭の薄皮とクリトリスがこすれて、快感が背筋を伝ってきた。やばい。亀頭の柔らかさがちょうどいい。固い指と違って、亀頭の表面でクリトリスを刺激されるのは気持ちがよくすぎた。

俺は、ふわふわした気分になる。脳内がマシユマロで埋め尽くされるような心地よさを感じる。

胴体をつかむ左手がゆっくりと下ろされた。俺の股間が強く押される。本当に入るのか。心臓がバクバクと鳴っている。

膣の入り口が開き、太い先端を受け入れていく。マジかよ。

熱の塊が体の中に入ってくる。指のときはまるで違う感覚だ。腰が膨らんだあと、腹が膨らむ。まるで妊娠中期のように腹部が広がった。

武田は、俺の胴をつかんでいた左手を放す。俺の体は、ペニ







カチカチとする。

ぎゅっと胴体が締めつけられた。それと同時に、ペニス全体が限界まで大きくなった。膣の奥深くに熱の塊が投入された。全身の温度が一、二度上昇した気がした。猛烈な勢いで、粘度の高い熱湯が注ぎ込まれる。全身が震えて、声が出ないように口を両手で押さえた。

手も足もビクビクと動いている。背骨を通して快感が脳へと送り込まれてくる。足の指を何度か開いたり閉じたりした。自分のクリトリスが、亀頭のように張り詰めているのが分かる。全身が快感に包まれている。

体内の隅々に精液を送り込まれた気がした。ザーメンが口からあふれ出てくるように錯覚した。実際には、膣の奥にたつぷ

りど注ぎ込まれたただけだ。

勢いよく射精していた武田のペニスが、少し落ち着きを取り戻した。俺は、声が出ないように口を押さえていた両手を下げて、ふにやりと脱力した。

「ふうっ。人生で一番勢いよく射精した」

武田が俺の胴体を放して、放心した顔をする。俺はまだ、武田のペニスを体の中に入れられた状態だ。

徐々にペニスのサイズが小さくなっていくのが分かる。それとともに俺の腹の膨らみも小さくなっていった。

小さくなった武田のペニスにまたがっている。俺は、恨みがましい目を武田に向けて、口を開いた。

「足に力が入らなくて動けない。抜いてくれ」





な」

武田はノートパソコンの画面をのぞき込む。俺も自分のノートパソコンの方に移動して画面を確認した。

画面がフリーズして止まっていた。俺はキーを手の平で押してみる。何の反応もなかった。マウスの方に移動して動かしてみるのが、うんともすんとも言わなかった。

「そっちはどうだ？」

見上げて尋ねる。

「止まっているな。これ、ゲームから他のアプリに切り換えもできなくなっている」

完全に固まっているようだ。

「再起動していいのか？」

俺は不安を覚えながら尋ねる。

「何か、不具合が起きそうだな」

確かに、それはありそうだな。

「この画面のまま、放っておくか？」

「その方がいいかもしれないな」

さて、どうするか。セックスをして冷静になったので、今後
のことを考える。

「武田。何か情報がないかスマホで検索してくれ。俺はこのサ
イズだから、あつかいにくい」

「分かった」

三十分ほど検索を続けたが、この状況の改善方法はネット上
に見つからなかった。ただ、ゲームの世界と繋がった人が書き

た、ブログやSNSはちらほらと見かけた。姿が変わったとか性別が変わったとか書いてある。実体験するまでは戯言だと思っていたが、本当だったのかと驚く。

ネット上に写真はない。誰かがアップしていそうな気がするのだが、消されたのかもしれない。試しにスマホでたがいの姿を撮ってみたが撮影はできる。カメラロールにも残っている。その写真をSNSにアップしてみたが、リロードすると消えていた。いよいよもって、謎だなと思った。

「これ、人前に出たら、どうなるんだろうな」

俺は自分の姿を確認する。

「少なくともニュースになるよな。でも、そういったニュースは見たことがないんだよな」

俺もそうだ。

「メン・イン・ブラックみたいなのが来て、消されるとか？」

「あり得るな。あるいは現実世界の復元力によって、世界が修正されるとか」

いずれにしても、あまり大々的に姿を見せるのはやばそうだと結論づける。

「とりあえず、このままじゃまずいよな。いくら俺たちが廃ゲーマーだからといって、人外になって生活するのは難しそうだしな」

「金さえあればどうにかなるが、仕送りをやり繰りしてゲーム三昧で遊んでいただけだしな。俺たちが大学を卒業できなければ、いずれ止まるだろう」

俺と武田は黙り込む。八方塞がりだ。どうしたものかと考えたが、俺たちの脳みそでは結論が出なかった。

「とりあえず、服を手に入れないとな。俺もおまえも裸だし。体に合うサイズの服なんかねえだろう」

「駅前の繁華街で探すか」

「おまえの筋肉サイズの服があるのかよ」

「それを言うと、綾野の服の方が難易度が高いぞ」

「俺の方は、人形の服を買えばいいだろう」

俺と武田は相談して、明日の午前中に買いに行くことに決めた。

「よし、綾野。方針が決まったことだし」

「何だ？」

「もう一回、セックスをさせてくれ」

俺はドン引きして武田の姿を見上げた。それから十分ほど追いかけてここをしたあと、俺は捕まって二回目の挿入をされた。



第2章

装備を買おう



翌日になった。俺は股間の違和感で目覚めた。朝陽が窓から漏れ込んでいる。俺は武田の体の上で、朝立ちのペニスを挿入されていた。

昨日、合計四回射精したくせに、まだ立つのかよと思った。

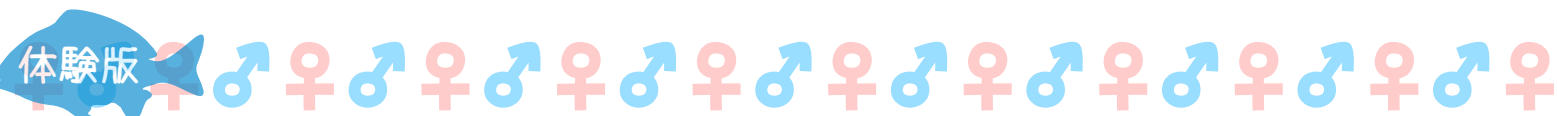
まあ、四回もやったせいで、俺も体が慣れてきた。最後の方は、ペニスをするりと受け入れられるようになっていた。だから寝ているあいだに入れられても、気づかなかったのだろう。

「ヒカルン、自分で動いたりできるか？」

俺が起きたことに気づいた武田が言ってきた。こいつ、俺とセックスするときだけ、キャラ名で呼びやがる。

「足に力が入るようになってきたからな。やってみる」
なんだかんだで、俺もこの状態を受け入れている。俺は姿勢







ぱりとした。



武田は浴衣を着ること裸の状態から脱した。かなりぱつんぱつんだが、警察に通報されない姿になった。

俺の方は、紙袋にのぞき穴を作り、その中に隠れて運んでもらうことにした。座った状態で外を見られるようにしたので、楽ちんだ。武田に運ばせるので歩く必要もない。会話は紙袋の中にスマホを入れて、必要な呼び出せるようにした。

「それじゃあ、駅前の店巡りに出発するぞ。武田、俺を運べ！」
「ラジャー！」



♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀ ♂ ♀

「少しぐらい、いいじゃないか」

「無駄遣いするな。これから、何にお金がかかるか分からないんだぞ」

俺がさすと武田は納得したようだ。ドール用の服を三着買い、俺たちは帰宅した。



俺の部屋に戻って、武田はさっそく自分のサイズに合う服に着替えた。俺の方も試着を始めた。さすがに店頭で服を着て試すことはできなかったからだ。

「下着も欲しかったんだが、ちよつとなかったな」





俺は服に手を触れる。そして、腰の辺りの布をなでた。

「たぶん、セックスできないぞ。ペニスを入れたら服が破れる」

「一回切りでもいい。後生だ。頼む」

「おまえ、絶対三着とも破くだろう。全ての服でセックスしたいって言うのが目に見えている」

「いや、そうなんだが」

「隠しもしねえのかよ」

「じゃあ、服をたくし上げて、破れないようにしてセックスしよう」

絶対に引かないつもりのようにだ。俺はだんだん面倒になってきた。机の上で立ち上がり、メイド服のスカートを胸の辺りまでたくし上げて下半身をさらした。





武田は涙を流して喜んでいる。

「で、次はどうして欲しいんだ？」

「ご主人様と言いながら、ご奉仕して欲しい」

俺は平手でちんぽを叩いた。跳ね返ってきたペニスに顔をはたかれて、ころんと転がった。

「あのなあ、俺は、おまえの欲望を叶えるための玩具じゃねえんだぞ」

「大丈夫。ヒカルンならできる」

「何をさわやかな笑顔で言っているんだ」

俺は、ふたたび服をたくし上げる。そして武田に、俺の体を持ち上げるように命令する。武田は俺を抱え上げて、ペニスの上にのせた。

「ご主人様、ご奉仕しますね。私の膣で、肉棒を包んで差し上げます」

たくし上げたスカートを少し持ち上げて、笑みを浮かべて首を傾げた。

武田は興奮しながら俺の体を下げる。ペニスが膣口を広げて、ずるりと体の奥に入ってきた。笑顔が崩れて切ない顔になる。ペニスで腹が膨れたせいで、服は胸の位置で引っかかったままになった。俺は懸命に笑顔を取り戻して、にっこりと微笑んだ。

武田が両手で腰をつかんできた。ゴツゴツと激しい挿入を繰り返されて、俺は全身を硬直させる。その硬直のせいで膣肉が締まって、肉棒を締め上げる。







第3章

動画撮影をしよう



やはり人形の服はすぐに駄目になった。洗濯するとよれたり、縫い目がほどけたり、縮んだりした。

そもそも手足の長さが合っていない。俺のキャラクター、ヒカルンの手足はそれほど長くない。端的に言うところ幼児体型だ。きちんとした服を用意するなら、オーダーメイドが必要だという結論に、俺たちは落ち着いた。

俺と武田は、腕組みをして向かい合っている。俺はコタツ机の上に座り、武田は座布団に座っている。

俺は渋々といった様子で口を開く。

「俺たち二人の共通の知人で、服を作れる人間といえ、一人しかいない」

「ああ、そしてこの状況を何の疑問を持たずに受け入れられそ

うなのは、あいつしかいない」

二人の意見は一致している。しかし、できればこの道は避けて通りたかった。

俺たち共通の、数少ない女友達。裁縫が得意で、コスプレ服を作ったり、その動画を撮影したりするのが大好きな女。俺たちと同じ廃ゲーマーで、同じ大学に通っている学友。

端的に言うところ、やつは変態だ。俺たちのようなウブな男たちには御しきれない暴れ馬だといえる。そして、決して男女の関係にはなりたくない、脳みその腐ったやつでもある。

「でもまあ、背に腹は代えられないな。俺たちだけで解決できることには限度がある」

俺は仕方がなさそうに言う。武田も苦渋の選択といったよう



武田がスマホを操作して電話をかける。予想したとおり出ない。十分以上、何度も電話をかけ続けたあと、ようやく何とか繋がった。

「何？」

不機嫌そうな声が響いてきた。武田は臆さず声をかける。

「今、綾野の部屋にいる。事情を今説明するのと、こっちに来てから説明するのと、どっちがいい？」

「ああん？ 用件があるなら、さっさと行ってよ」

「たぶん、おまえ、見ないと信じないと思うから」

「大丈夫、大丈夫。私、たいていのことなら信じるから。空から女の子が降ってきたの？ それとも未来から、子孫の女の子がタイムトラベルしてきたの？」

俺は、パタパタと羽を動かして空中に浮き、武田と相沢の会話を聞いている。相沢のやつ、めっちゃくちや適当に話していると思う。

「俺と綾野がトレサバをやっているのは知っているよな？」

「私もやっているわよ。女商人のアイザック。あんたも、知っているでしょう。今もやっているわよ」

「それで、ある条件を満たすと、ゲームの世界と繋がるという噂があるのは知っているか？」

「知っている。都市伝説でしょう。あんなたち、検証するとか息巻いていたよね」

「成功した。そうしたら、俺たちの体がゲームのキャラになった。俺はマッチョな男戦士になり、綾野はドールみたいな女妖



顔が現れる。俺たちはカメラに入るようにして手を振った。

「新手の拡張現実？」

「本物だよ」

「ていうか、ヒカルン、裸じゃない」

「武田とドールの服を買ってきたけど、洗濯したらすぐに壊れたんだよ。だから、相沢に作ってもらおうと思って連絡したんだ」

相沢はこちらの姿が映った画面を、じっと見つめているようだ。

「で、あんたら、やったの？」

「はっ？」

俺は疑問の声を上げる。



「おまえ、俺がいないところで、そんなことを言っていたのかよ」

どんな同盟だと思った。

「それで、やったの？」

「やった」

武田は真面目な顔で答える。





「相沢、その動画は、何円で売ってくれるのかな？」

「おいっ！」

俺は真剣に怒りながら文句を言う。

ふふふ、私が作った服で、他人が性交して、その動画を撮るのが私の趣味なの。うちには、その動画が大量にある。流出は



相沢はウキウキだ。やはり頼るべきではなかったか。俺は少しだけ後悔する。武田を見ると、エロ動画の撮影に、今から興奮しているようだった。

